

2019/6/2 関西社会学会第70回大会 @関西学院大学

高齢者におけるネットを介した 対人交流と主観的幸福との関連

2018年「高齢者の情報行動」調査の分析結果から

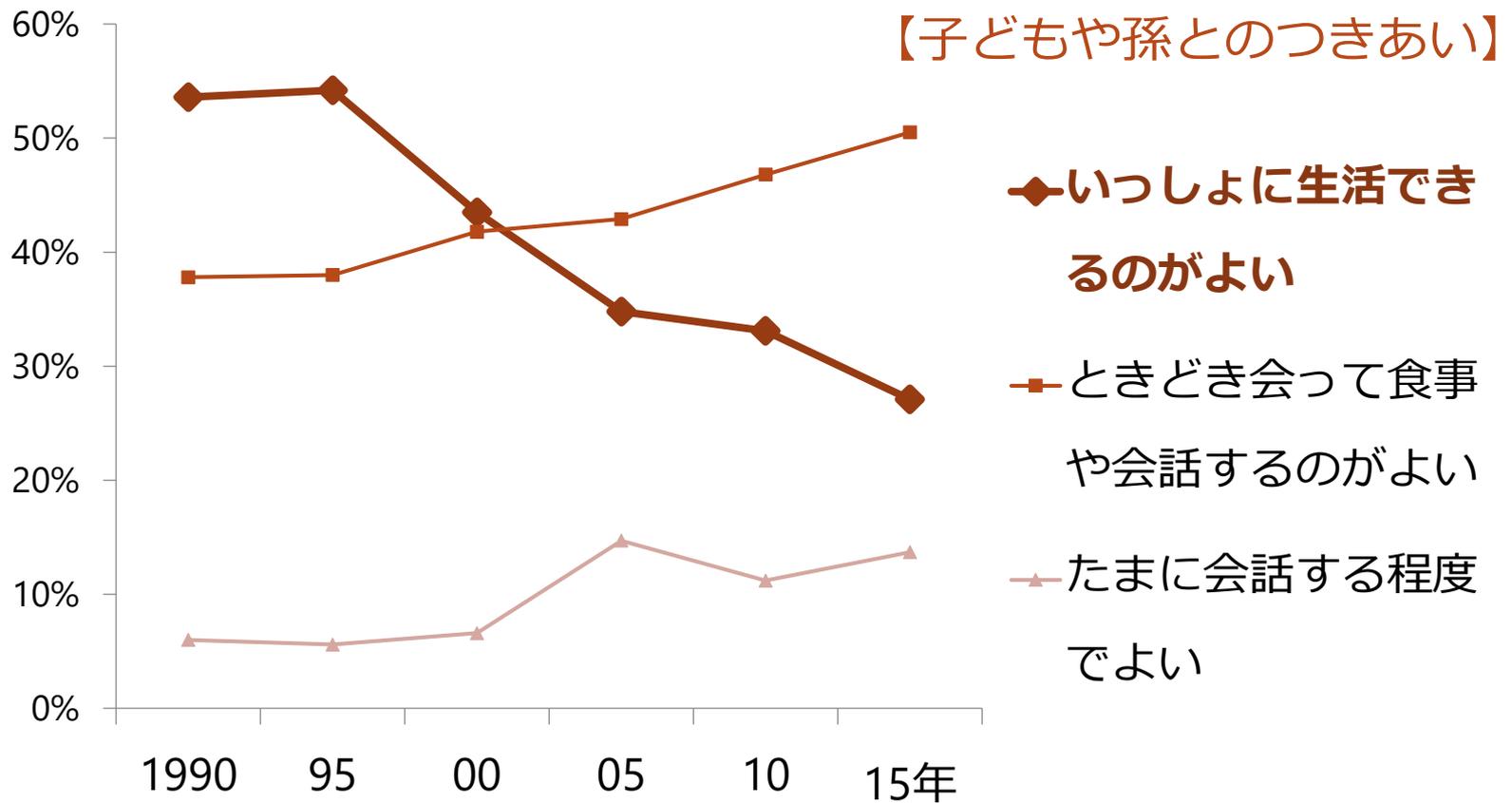
辻 大介 (大阪大学)

【 本報告の目的 】

高年層（60～79歳）において、インターネットを介した対人的交流が、主観的幸福に寄与するものであるかを、中年層（40～59歳）との対比をまじえつつ、質問紙調査データから検証する

- 人間関係の充足 → 死亡リスクの低下
 - Holt-Lunstad et al. (2010) ... 日本を含む世界各地の先行研究をメタ分析
- 親族・友人関係の充足 → 生活満足度の上昇
 - Cheng & Chan (2006) ... 香港で60歳以上の高齢者を対象に調査。男性より女性に強い効果
- 近隣・友人ネットワーク数 - x → 生活満足度
 - 古谷野 (1993) ... 全国65歳以上を対象とした無作為抽出による訪問面接調査

古谷野の調査当時（子同居のみ生活満足度に効果）とは、 人間関係に対する考え方もかなり変わった

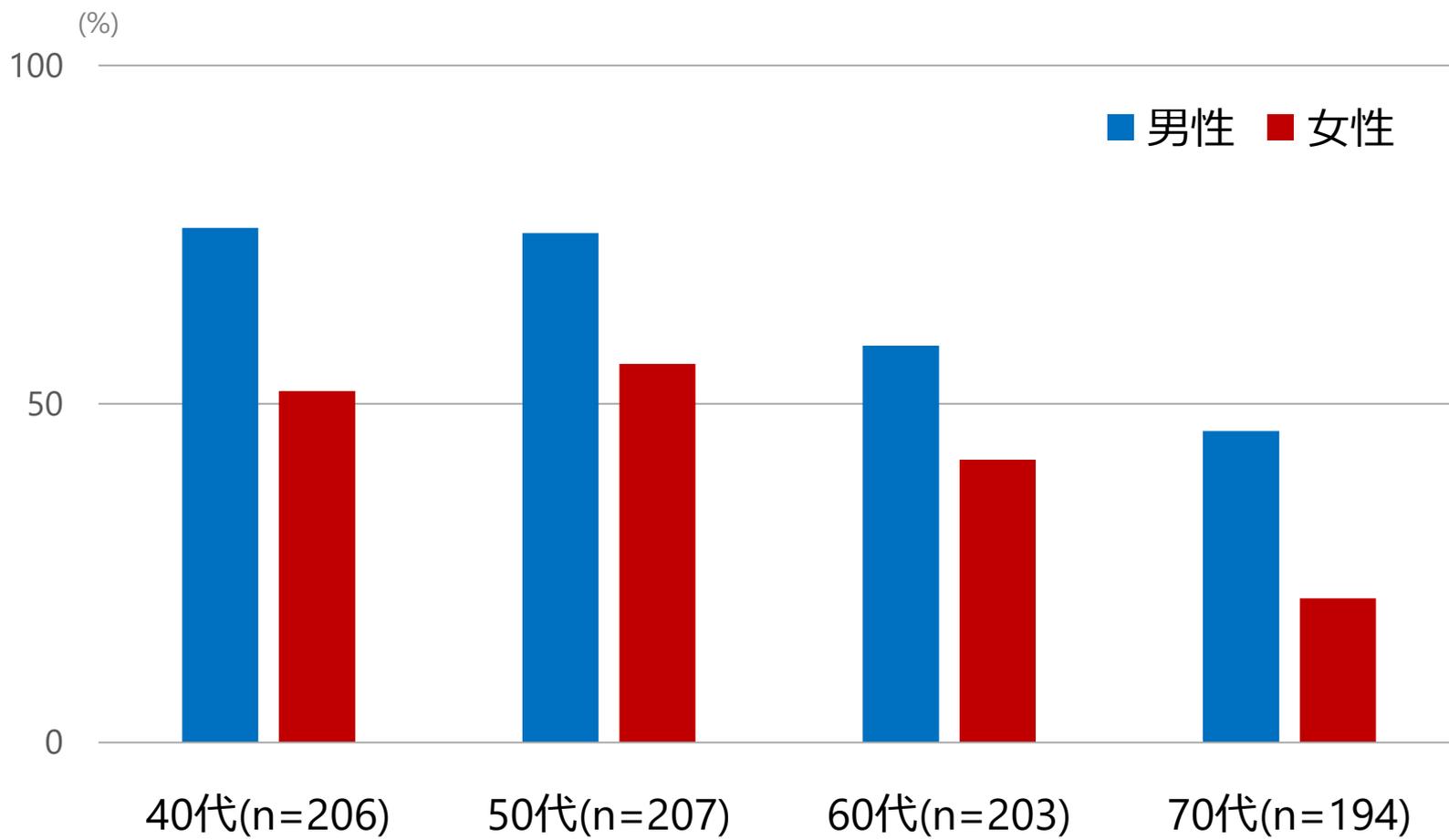


- 現在では、適度な距離をおいた人間関係が生活満足（主観的幸福）にとって重要になっているのではないか
 - 近隣・友人・別居親族 > 同居家族？
- ネットを介した交流は「適度な距離」を保つことによって、主観的幸福に資するかも
 - 身体の衰え等によって社会的に孤立しがちな高齢者にとって、単純なメリットも大きい

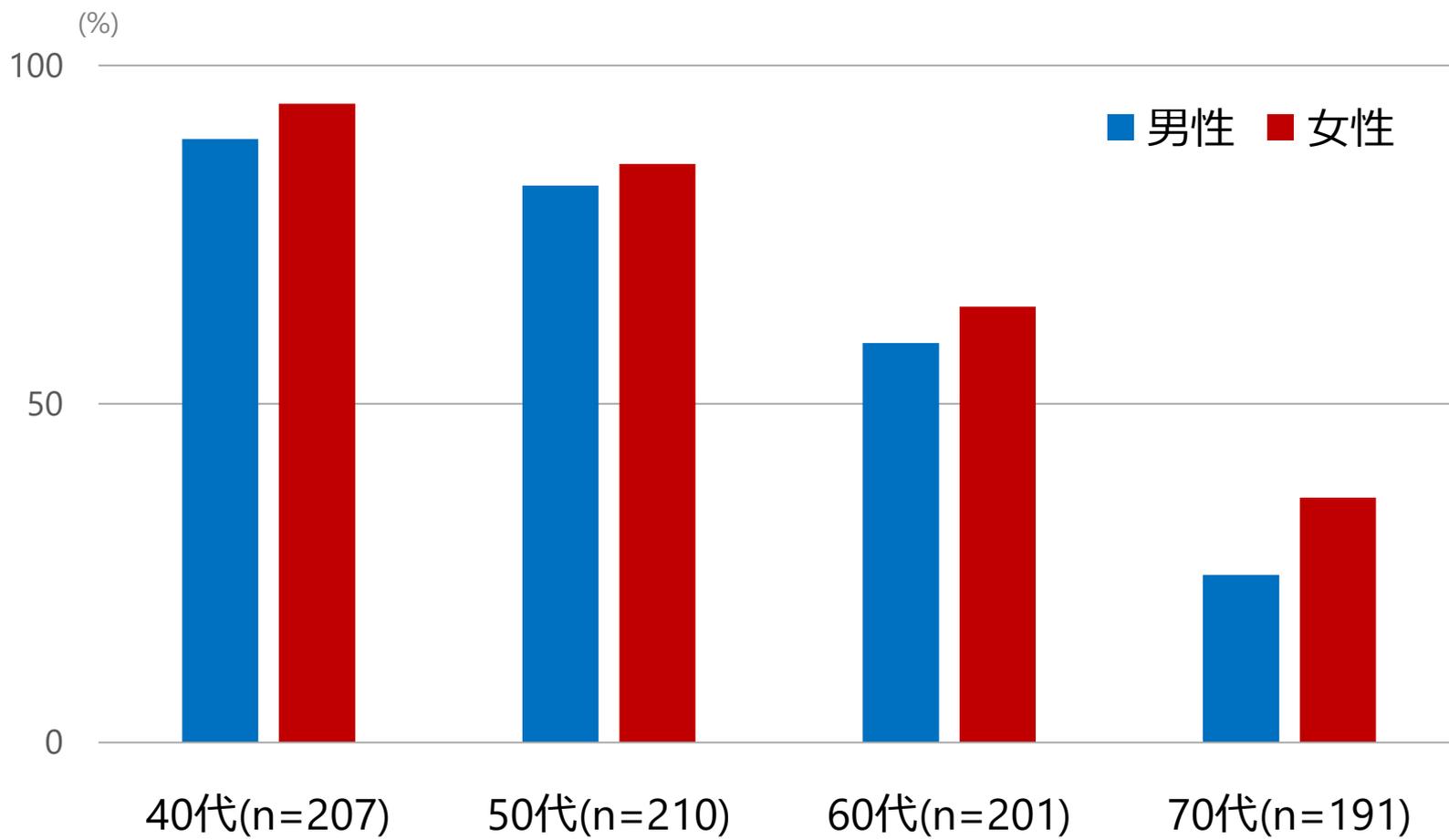
【 調査データの概要 】

- 中央調査社の保有モニターから、全国40～79歳を対象に、性×年代×地域都市規模別にサンプル数を割り当てて、無作為抽出
- 自記式、郵送配布回収、有効回答827ケース
 - 本調査は科研費基盤A「日本人の情報行動、その四半世紀にわたる変遷と超高齢社会における課題の検討」(研究代表：橋元良明、課題番号18H03645) による研究の一環としておこなわれた

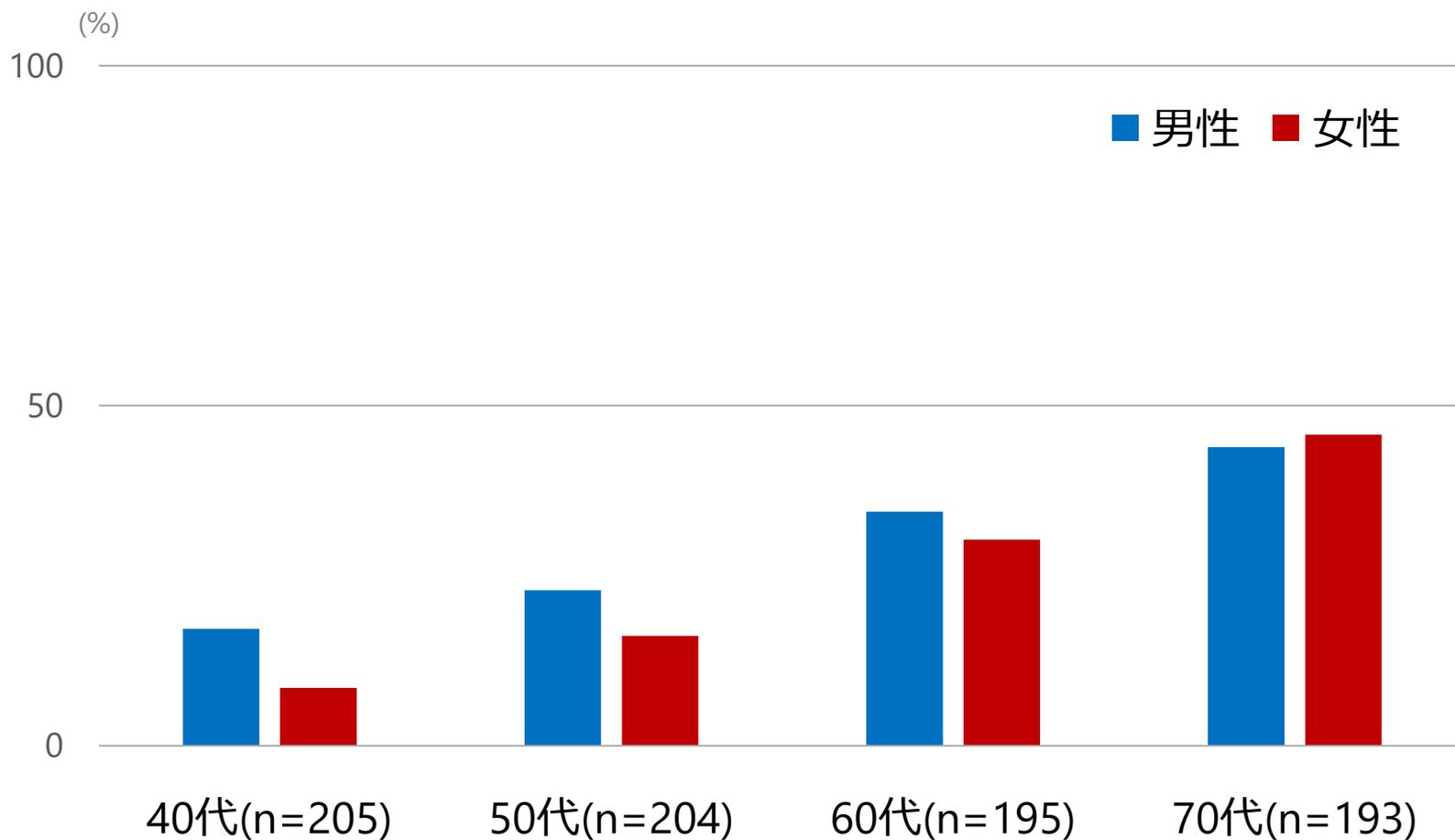
パソコン：メールやLINEなどでメッセージをやりとり



スマホ：メールやLINEなどでメッセージをやりとり



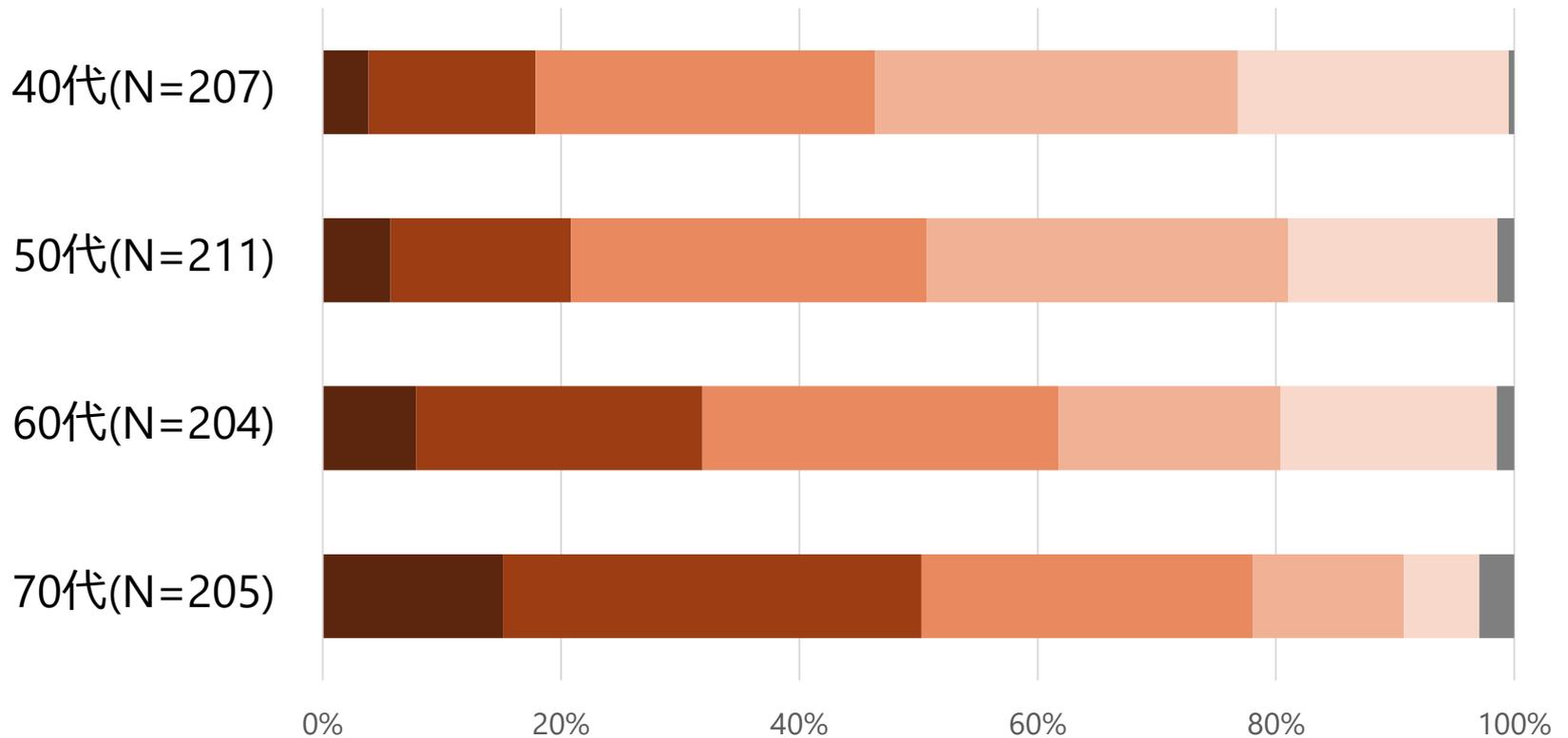
携帯電話：メールやLINEなどでメッセージをやりとり



近所・地域の人との FtF

「会って話したり遊んだりする」

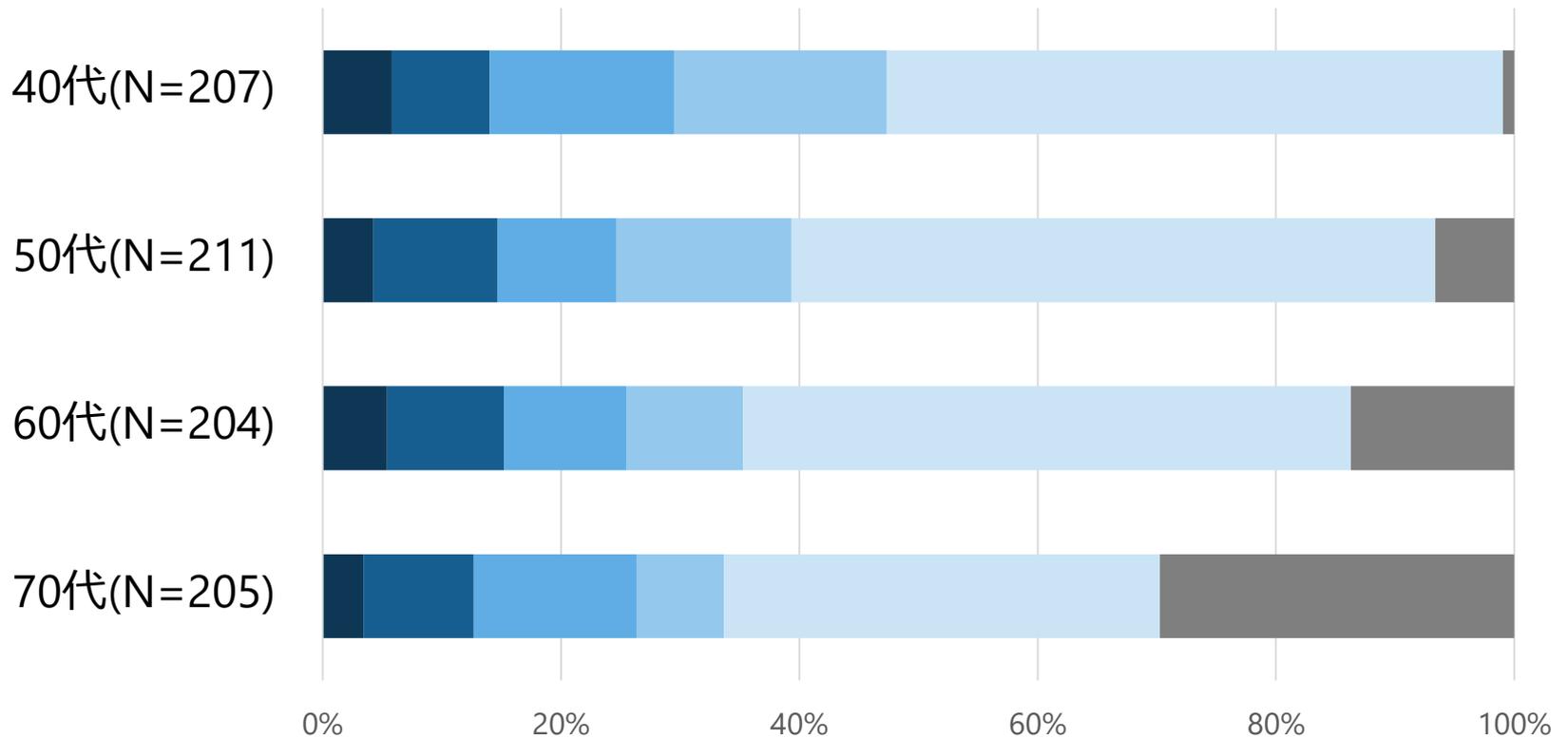
■ 日1回以上 ■ 週数回 ■ 月数回 ■ 年数回 ■ 年1回以下 ■ NA



近所・地域の人との CMC

「メールやSNSで個人的なやりとりをする」

■ 日1回以上 ■ 週数回 ■ 月数回 ■ 年数回 ■ 年1回以下 ■ NA



- 近距離の友人（1時間以内で会える）、遠距離の友人（1時間以上）、親せき・親族（同居家族のぞく）とのCMCについても、高年齢層ほど欠損値が増える
- 以下、相関レベル以上の分析では、基本的に欠損値を除外した結果になるので、その点で解釈には一定の留保が必要

FtFとCMCの単純相関

	高年層 (60~79歳)	中年層 (40~59歳)
近隣	.42	.47
近距離の友人	.54	.65
遠距離の友人	.51	.54
親族	.49	.44

(いずれも $p < .001$ で有意)

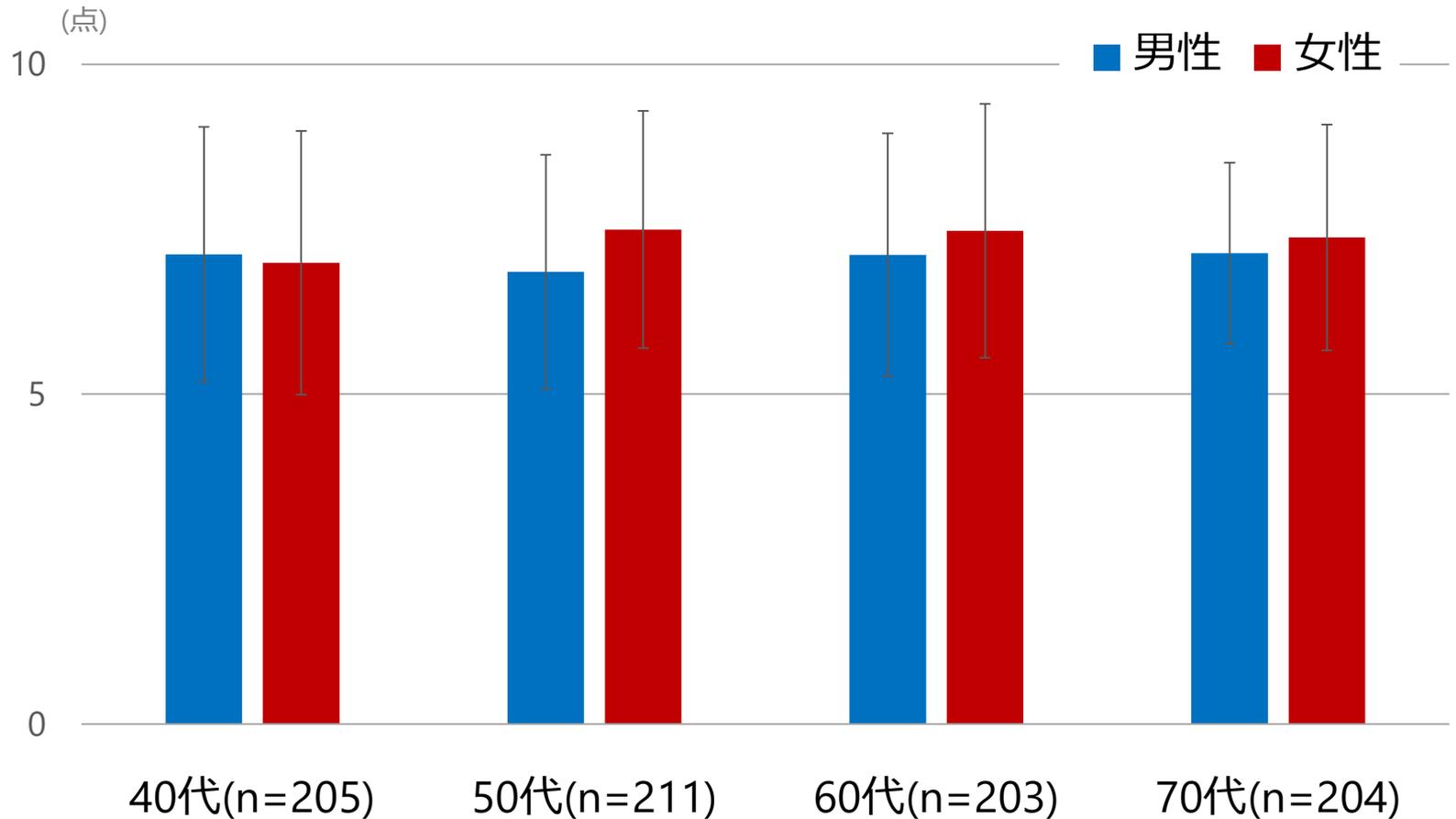
- 社交性等で統制しても高度に有意な相関
- FtF → CMC か？ CMC → FtF か？

3次積率を利用した単回帰分析（豊田 2007）で 因果の向きのアタリを付けてみる

- 豊田秀樹氏の開発したRの関数 **ADF3reg()** で分析
- 近隣・近距離の友人・親族いずれについても、概ね CMC→FtF の向きが示唆（性別、中／高年層別でも）
 - 遠距離の友人についてはもっぱら不適解
- 3次積率を用いた分析は変数の分布形の小さな変化
≡バイアスに敏感・脆弱な面があるため、今回は
あくまで参考までの結果紹介にとどめる

【主観的幸福】

「とても幸せ」10点～「とても不幸」0点として自己評定



※ エラーバーは標準偏差

主観的幸福との単純相関

		高年層 (60~79歳)	中年層 (40~59歳)
FtF	近隣	.16 **	-.04
	近距離の友人	.10 *	.07
	遠距離の友人	.06	-.03
	親族	.08	.08 †
CMC	近隣	.03	.00
	近距離の友人	.03	.08
	遠距離の友人	.14 *	-.01
	親族	.10 †	.13 *

** p<.01, * p<.05, † p<.10 の有意性

主観的幸福を従属変数として重回帰分析

- 独立変数

- 子同居ダミー
- 近隣 FtF・CMC
- 遠距離の友人 FtF・CMC
- 親族 FtF・CMC

- 多重共線性を避ける ($vif < 2$) ため、「近距離の友人」は投入しない

- 統制変数

- 健康状態 (5件法)
- 社交性 (4件法の3問を単純加算、 $\alpha = .78$)
- 性別ダミー、年齢、教育年数、世帯年収、有職ダミー (フルタイム+パート)

OLS重回帰分析の結果

(数値は標準化係数 β 、統制変数は割愛)

		高年層	中年層
FtF	子同居	-.08	.04
	近隣	+.15 *	-.09
	遠距離の友人	-.06	-.04
	親族	.03	.04
CMC	近隣	-.15 *	.04
	遠距離の友人	.02	-.05
	親族	.06	.07
	adj. R^2	.14 ***	.14 ***
	(n=)	(296)	(391)

※ 有意水準はロバスト標準誤差による

完全情報最尤法(FIML)による 欠損値処理後の推定結果

		高年層	中年層
FtF	子同居	-0.02	.04
	近隣	+0.13 *	-0.08
	遠距離の友人	-0.08	-0.05
	親族	.01	.04
CMC	近隣	-0.14 *	.03
	遠距離の友人	.03	-0.04
	親族	.05	.08
Bentler-Raykov R^2		.20 ***	.18 ***
(n=)		(409)	(418)

※ 有意水準はロバスト標準誤差による

孤独感を従属変数とした分析結果

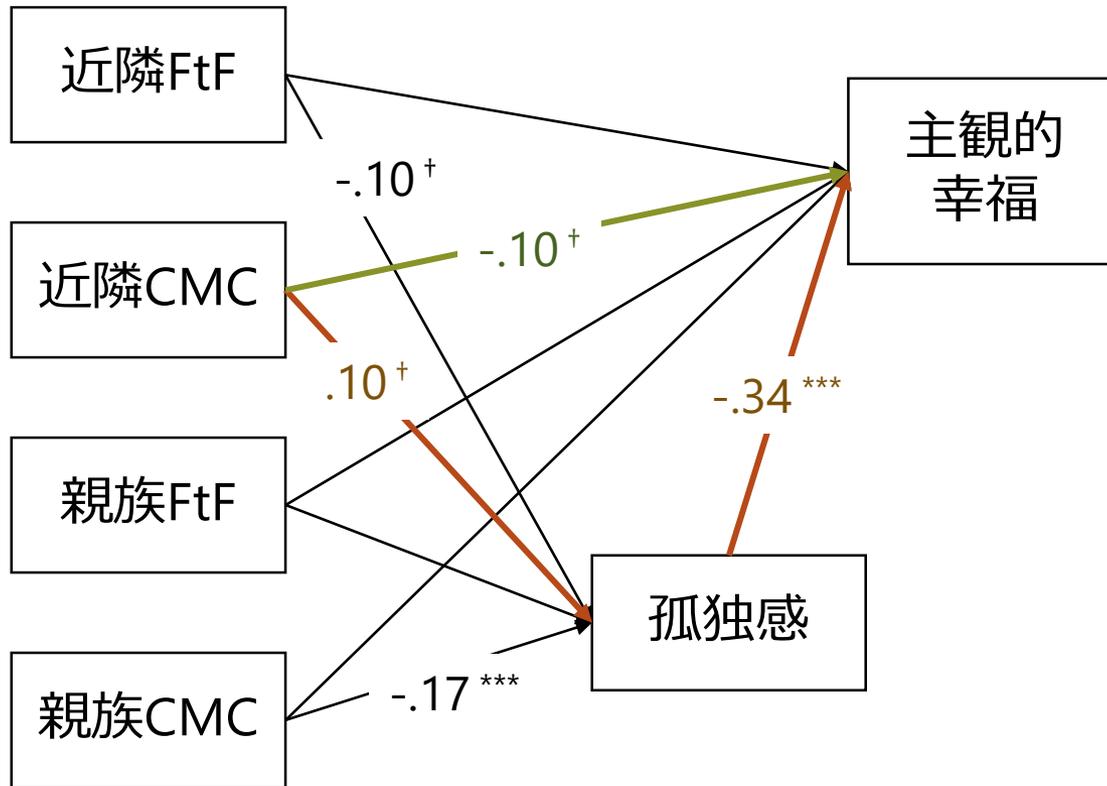
(独立・統制変数は同じ)

		高年層	中年層
FtF	子同居	-.01	.00
	近隣	-.11 *	.01
	遠距離の友人	.04	.01
	親族	-.03	-.04
CMC	近隣	+.10 †	-.02
	遠距離の友人	.03	-.01
	親族	-.17 **	-.04
	Bentler-Raykov R^2	.22 ***	.25 ***
	(n=)	(409)	(418)

※ 有意水準はロバスト標準誤差による

近隣・親族とのFtF・CMCを独立変数としたパス解析

(高年層のみ：統制変数は同じ、図では省略)



「インターネット・パラドクス」 (Kraut et al. 1998) を 思わせる結果

- 対人交流を媒介するインターネットが、高年層では孤独感を高め、主観的幸福をそこなう
 - 近隣とのCMCにあてはまる
 - が、親族とのCMCは孤独感を低める（幸福感とは無関連）
 - 友人関係は概して孤独感にも幸福感にも無関連
- 近隣CMCが主観的幸福におよぼす効果は、孤独感を介した間接効果よりも、直接効果が大きい

【今後の課題】

1. Kraut et al.(1998)は、CMCの弱い紐帯がFtFの強い紐帯を浸食することで、孤独感や抑鬱感が高まると考えたが、今回の3次積率を用いた因果推定が仮に正しかったとすれば、別の過程・機制によることになる
2. 近隣とのCMCは、孤独感以外のどのような経路を介して主観的幸福を下げるのか
 - これから本調査にとりかかるので、これら2点について何か示唆いただけることがあればお願いします

文献

- Cheng, S-T. & Chan, A.C.M., 2006, Relationship with others and life satisfaction in later life: Do gender and widowhood make a difference?, *The Journals of Gerontology: Series B*, 61(1), pp.46-53.
- Holt-Lunstad, J., Smith, T.B. & Layton, J.B., 2010, Social relationships and mortality risk: A meta-analytic review, *PLoS Medicine*, 7(7): e1000316.
- Kraut, R. et al., 1998, Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?, *American Psychologist*, 53(9), pp.1017-1031.
- 古谷野亘, 1993, 「老後の幸福感の関連要因」 『理論と方法』 8 巻2 号, pp.111-125.
- 豊田秀樹, 2007, 『共分散構造分析 理論編』 朝倉書店.
- 豊田秀樹(編), 2014, 『共分散構造分析 R編——構造方程式モデリング』 東京図書.